

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

## 特集：地域における地理学の役割：博物館・市町村史の中の地理学：「博物館・資料館と地理学」：学芸員の立場から

SAGAWA, Kazuhiro / 佐川, 和裕

---

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

31

(開始ページ / Start Page)

3

(終了ページ / End Page)

9

(発行年 / Year)

2000-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025765>

## 「博物館・資料館と地理学」

### —学芸員の立場から—

佐 川 和 裕

- I はじめに
- II 資料館と学芸員
- III 地域性の認識

- IV 求められる視点
- V まとめにかえて

#### I はじめに

少なくとも筆者自身は地理学徒としての自負は持っていたつもりであるが、日常の業務においてはむしろ地理学的思考を特段に意識せずに活動してきたことを、まず吐露しなければならない。したがって、本誌で組まれた特集の場で発言するのはいささか後ろめたさが残る。しかし、言い換えれば、資料館という現場において地理学徒であり続けることの難しさがあったことも事実である。そのような現実を直視することで地域博物館<sup>1)</sup>と地理学とのかかわり、あるいは地理学の可能性を考える布石になればご容赦いただけるのではないかと考え、筆者の勤務する大磯町郷土資料館における実践の中からささやかな意見を述べてみた<sup>2)</sup>。

#### II 資料館と学芸員

神奈川県の中央南部に位置している大磯町は、面積 17,232㎡、人口 32,000 人余りの小さな町である。南は相模湾に望み、背後に 100m 前後の山陵が連なり町域の約 65% を丘陵部が占めている。狭小な町域ではあるが、海岸部から丘陵部まで、景観のみならず生活全般において多様な展開がみられる地域といえる。

1988 (昭和 63) 年、大磯町郷土資料館は「湘南の丘陵と海」というテーマのもとで、大磯と周辺地域を含む豊かな風土の拡がりをとらえ、地域に

根ざした情報センターとしての役割を担って開館した。基本的には社会教育施設としての位置付けであるが、観光的な役割を否定するものではなく、むしろ開館当初から積極的に対応してきたことも特徴のひとつである。観光資源の乏しい小規模な町にとって資料館の存在は大きく、県立大磯城山公園 (旧三井家別邸) 内に立地することもあって、折りにふれて観光的な利用者も積極的に受け入れている。また、博物館施設を目的としていないような視察においても、必ずといっていいほど見学先に組み入れられてきたことでも町の資料館に対する認識がうかがわれる。その意味では資料館の持つ役割は多様で、その責務は十分に果たしてきたといってよいであろう。しかし、開館 10 年を経過してさまざまな課題が顕在化している。それらの課題をひとつひとつ議論していくことは本稿の趣旨ではないため必要以上触れないが、館活動の中でどのような視座が求められてきたのか、あるいは今後の見込みなどを確認することで、地理学とのかかわりが見えてくるのではないかと考えている。

さて、当館は、開館と同時に博物館法に基づく登録博物館として位置付けられることになった。市町村の設置する博物館には 6 名程度の学芸員の配置が望ましいことをうたっていた「公立博物館の設置及び運営に関する基準」にこそ及ばなかったが、開館当初は正職員 4 名がいずれも学芸員という構成であった。小規模な自治体の、小規模な博物館の中ではかなり恵まれていたといえる。条例や条例施行規則には専門的、技術的な実務を行

なう施設として、職員の専門性もとりあえず認識されていた。「とりあえず」とことわったのは、専門的な職種という認識はあるのだが、学芸員の身分的な位置付けまでに反映されていなかったためである。学芸員は研究職でもなければ技術職でも教育職でもない。つまり、一般行政事務職と何ら変わりはなく、定例の人事異動の対象になり得るというものであった。もちろん、施設の維持管理や庶務的な業務に至るまで学芸員4名で分担してこなさなければならず、多くの課題を抱えての開館であった。しかし、ここで特記しておきたいのは具体的な実務分担についての問題である。すなわち、「大磯町郷土資料館の設置、管理等に関する条例」の第2条には、設置目的として次のように表記されている。「博物館法（昭和26年法律第285号）に基づき、郷土の考古、歴史、民俗、自然科学等に関する資料（以下「郷土資料」という）の収集、保管、展示等を行うとともに、これらの郷土資料に関する調査研究と教育普及活動を行い、地方文化の発展に寄与するために郷土資料館を設置する」とある。要するに、「郷土資料」が考古、歴史、民俗、自然科学という分類名称で認識されていたことである。

本町のような小さな町では、文化財保護法にかかわる埋蔵文化財の調査や整理を手がける考古分野は大きな位置を占めており、資料館構想にはその延長上での論議も多分に含まれていた。文化財保護行政において教育委員会事務局（社会教育課）に専門職員がいないこともあって、学術のみならず行政的な発掘調査も資料館の考古担当が出向くという変則的な措置がとられることになった。そして、最終的な学芸員の構成は考古担当が2名、民俗担当1名、自然科学担当1名ということになったのである。さて、人文地理学を専攻していた筆者は自ずと民俗担当を甘受することになった。更に歴史の学芸員が配置されなかったことから、歴史を含めた人文分野にかかわるものは、すべて民俗が担当せざるを得ない状況が作られたのである。その後数年を経て、考古担当1名が社会教育課へ転出し、代わりに庶務担当事務職員が配属されたが、実務に関しては何ら状況は変

わらなかった。このことは先行する条例にあわせた専門分野の配置が、行政と現場との認識のギャップを増幅させていることは明らかであり、要するに、博物館資料を考古、歴史、民俗、自然科学と分類する認識が、専門性を十分に発揮づらという現実を作り出してきたと言えるだろう。いわば、これが巻頭で述べた地理学徒としての意識を維持することの難しさの一因であったのかも知れない。資料館設立の準備段階において十分な論議がなされていなかったと言われればそれまでだが、現実的には行政が思い描く内容と現場での認識のズレは決して珍しいことではないと思われる。

なお、大磯町では、1999（平成11）年10月1日付で機構改革を実施した。係制を廃して班制に移行するという中で、文化財保護行政と町史編纂事業が資料館へ編入された。ここではその是非について論じる紙幅はないが、館活動が大きな転換期を迎えていることは確かである。資料館と学芸員の役割について、あらためて見つめなおすべき時期がきているといえる。

### Ⅲ 地域性の認識

東海道とともに発展してきた大磯は、「明治維新前は毎日諸大名の宿泊があって、草鞋を商っても、馬糞を拾っても、生活は優に立行った」（『大磯案内』1922）ほど宿駅に依存してきた。しかし、明治以降、その機能を失うと「大磯驛の如きは最も時勢の變遷によりて甚だしき衰運を來志全驛數百戸の生計は既に絶て人々將に四方に離散せんとする」（『相州大山記大磯名勝誌』1889）ほど疲弊し、著しい窮迫生活を余儀なくされたという。1885（明治18）年、陸軍軍医総監を歴任した松本順の提唱により、大磯に海水浴場が開設された。もともと、海水浴は病氣治療や健康増進を目的としたものであった。大磯が海水浴場としての条件に合致していることからの選定であったが、同時に当時の町の経済状況を憂慮していた松本の見識も忘れてはならない。更に1887（明治20）年には横浜・国府津間の鉄道開通に伴い大磯駅が開設されて京浜方面からの集客も期待できるようになる

と、旅館業をはじめとするさまざまな職種が育まれ、大磯とその周縁地域に大きな経済効果をもたらした。しかし、一方で観光と生業との軋轢や確執の問題も内在しており、また、「住民に恒産あるもの甚だ少く、所謂明日は明日の風が吹くと云ふ気風を養成した」（『大磯案内』1922）というように、住民の気質という問題まで表面化している。このような史実とそれらを生み出した風土、いわば「地域性」の問題認識が館事業の大きな骨子となっていた。

例えば、特別展や企画展などの展示活動では、島崎藤村、安田靉彦、三井高棟、吉田茂、川瀬竹春、菊池重三郎、松本順、伊藤博文、高橋誠一郎、山県有朋などといった大磯にゆかりのある人々を媒介にして地域を語る方法が中心となった。幸い

これらは外から見た大磯のイメージに上手く同調したようで、大磯の文化特性をアピールするという目的は概ね達成できたのではないかと考えており、あわせて資料館の存在を周知する力と成り得たとも思っている。また、このような活動のなかで新たな発見もあった。即ち、別荘地や保養地としての性格を備えたことを反映して、絵はがきの類が非常に数多く刊行されているのである。絵はがきには当時の景観だけでなく人々の生活や表情に至るまで映し出されており、絵はがきを「時代を読む資料」として位置付けて、やがて絵はがきの収集が大きなテーマのひとつとなった。そして、企画展「なつかしの風景Ⅰ 海と海水浴場」（1991）、「なつかしの風景Ⅱ 家と町並み」（1992）、「なつかしの風景Ⅲ 史蹟と名勝」（1993）

表1 大磯町郷土資料館特別展一覧

回数	テーマ	期間
第1回	「町屋園の日々ー島崎藤村とその周辺ー」	1988. 10. 26~11. 17
第2回	「安田靉彦の画と書ー大磯に在りし六十余年ー」	1989. 10. 17~11. 12
第3回	「城山荘と城山窯ー昭和の残影ー」	1990. 10. 14~11. 11
第4回	「大磯と吉田茂」	1991. 10. 13~11. 10
第5回	「相模湾の動物」	1992. 10. 10~11. 22
第6回	「初代 竹春展」	1993. 10. 17~11. 21
第7回	「襦袢ー紅絹からのメッセージ/西相模の仕事着」	1994. 10. 16~11. 20
第8回	「牧野富太郎と西相模の自然」	1995. 10. 15~11. 29
第9回	「おばあちゃんの針仕事」	1996. 10. 13~11. 17
第10回	「動物の生活と体のつくりー羽と歯を中心にー」	1997. 10. 12~11. 16

表2 大磯町郷土資料館企画展一覧

回数	テーマ	期間
第1回	「大磯再発見1 資料が語るもの」	1988. 12. 6~1989. 1. 29
第2回	「叙情の人菊池重三郎 よせられた書簡を中心に」	1989. 4. 18~6. 18
第3回	「丘陵の動物ー生活史を中心にー」	1989. 7. 11~9. 10
第4回	「大磯再発見2 モノ・もの・mono」	1989. 12. 12~1990. 2. 18
第5回	「土器が語る縄文時代の湘南」	1990. 3. 6~4. 8
第6回	「昭和の風俗画家 長瀬寶の世界」	1990. 5. 5~6. 3
第7回	「館収蔵品による 大磯ゆかりの人々の逸品」	1990. 7. 24~9. 2
第8回	「ヤゴと小川・ため池の生きもの」	1991. 3. 3~4. 7
第9回	「土器が語る弥生時代の湘南」	1991. 5. 5~6. 9
第10回	「なつかしの風景Ⅰ 海と海水浴場」	1991. 7. 21~8. 31
第11回	「相模湾の漁船と船大工」	1992. 3. 1~4. 5
第12回	「なつかしの風景Ⅱ 家と町並み」	1992. 7. 26~9. 6
第13回	「湘南の考古資料展」	1993. 3. 6~4. 4
第14回	「館収蔵品による 大磯ゆかりの人々の逸品2」	1993. 4. 27~6. 20

第15回 「なつかしの風景Ⅲ 史蹟と名勝」	1993. 7. 25～9. 5
第16回 「新春資料展」	1994. 1. 23～2. 27
第17回 「雛人形展」	1994. 3. 3～4. 4
第18回 「雲の画家／山本瑛幾遺作展」	1994. 5. 5～6. 12
第19回 「湘南の貝化石」	1994. 7. 17～9. 4
第20回 「地中からの足音—近年の発掘調査の成果—」	1995. 3. 19～6. 11
第21回 「オタマシ—神のすがた—」	1995. 7. 30～9. 10
第22回 「めんこ—なつかしのヒーローたち」	1995. 12. 3～1996. 2. 18
第23回 「雛人形展」	1996. 2. 25～4. 7
第24回 「アオバトと照ヶ崎」	1996. 5. 26～6. 9
第25回 「徳利」	1997. 3. 16～4. 27
第26回 「鍬 KUWA—土の記憶—」	1997. 7. 27～9. 7
第27回 「雛人形展」	1998. 2. 15～4. 5
第28回 「相模湾の貝類Ⅰ—大磯海域にすむマキガイ—」	1998. 7. 12～9. 6
第29回 「日本列島絵はがき紀行」	1998. 10. 18～12. 6
第30回 「地中からの足音Ⅱ—近年の発掘調査の成果—」	1999. 3. 7～4. 11
第31回 「相模湾の貝類Ⅱ—大磯周辺海域の二枚貝—」	1999. 7. 21～9. 5
第31回 巡回展 「弥生の幕あけ」	1999. 11. 7～11. 28

の開催を試みた。このような視覚的な資料を媒介として訴えた展示は集客に優れており、資料収集の呼び水ともなった。後に購入した絵はがきを含めて、現在では5000点余りに及び、当館の特徴的な資料として大きな位置を占めるにまで至っている。1998（平成10）年には所蔵絵はがきの公開を念頭におきながら企画展「日本列島絵はがき紀行」を開催した。この展示は、明治以降における庶民の旅のなかで手頃な土産品として、あるいは情報源としての役割を負ってきたという一面をとらえたもので、あわせて展示を通して観覧者それぞれのノスタルジーを喚起し、更には「旅—非日常—」の空間を思い描いていただくことを目指したものであった。

絵はがきという媒体に限ってみても、当館のみならず各地の博物館においても刮目している。ごく最近の展示では、愛媛県歴史文化博物館「えひめの絵はがき—絵はがきが語る明治・大正・昭和—」（1998. 2. 28～3. 29）、新宿区歴史博物館「巷の目撃者—絵はがきがとらえた明治・大正・昭和—」（1999. 10. 23～12. 5）、藤沢市教育委員会博物館建設準備担当「絵葉書に見る江の島今昔」（1999. 11. 2～11. 28）などが開催されている。それらの内容も、絵はがきを通して明治から昭和に至るまでの景観の変遷を見る。あるいはそ

の背後にある庶民の暮らしぶりを探る。絵はがきの歴史的な経緯とともに絵はがきそのものの役割と機能を確認するなど、さまざまな視点が提示されている。更に役割や機能にまで地域性が及んでいることを読み取ることもできるなど、多彩な展開が可能で資料といえる。加えて、最近では絵はがきや古写真を集成した写真集や解説書が公私ともに多刊されている。ヴィジュアルな再現が受け入れられやすいゆえの安易な内容も見うけられないこともないが、ここでは、むしろその有用性を特筆しておくべきだろう。

また、ここ数年来、絵画資料の内容を検証しようという動きが盛んになってきた。絵画資料というと、従来は美術史的な研究が主流であったが、もっと別な角度からアプローチをしていこうというもので、筆者も参加している「絵画資料をよむ会」では、四季耕作図を中心とした農耕図の研究に取り組んでいる。民俗学、民具学、農業技術史、歴史学などさまざまな分野からとらえることで、場合によっては資料学、あるいは絵画資料学といった設定も可能になるのではないかと考えられる。そして、このように総括的な視点の重要性を再確認しようという動きそのものが地理学的思考を予感させるものといえる。

このような中で、相模原市立博物館において開

催された企画展「都市化の中の暮らし～生活様式と生活用具の変化～」(1999. 4. 29～6. 13)は実に興味深かった。相模原市立博物館は、当初から東京近郊都市における博物館づくりを意識してきた館で、地理学担当の学芸員を配して、都市化が進む中で変貌する生活用具にも視点をあて続けてきた。今回の展示では、それらの地道な調査収集活動の積み重ねの上に成り立ったものといえる。なかでも、電化製品や洋式生活への変化をたどった居住空間の再現展示は、見る者を圧倒的なリアリティーで引きつけていた。おそらく観覧者のほとんどが、個々の体験や記憶に重ね合わせることができたはずであり、それが大きな力となっていることを実感させる展示であった。また、電化製品や洋式生活の中にも地域性が宿っている可能性の指摘<sup>3)</sup>も再認識する契機ともなった。これは、いわゆる「現代的視点に立った地域性の一つの表現方法」(浜田弘明, 1987)を実に巧みに体现した展示であり、地域博物館における地理学的思考の有用性を示唆している好例であろう。

#### IV 求められる視点

当館では、運営事務、維持管理、学芸活動、特別展、企画展、教育普及というそれぞれの事業に基づいて活動をおこなっている。なかでも特別展や企画展は、その準備期間を含めれば、最も時間を必要とする仕事であることは言うまでもない。

しかし、日々の仕事の中で最も多く時間を割くのはレファレンスである。

日頃からレファレンスの多さを感じていたが、実際にどのくらいの依頼があるのかを確認するため、試みにレファレンス票を作成して、1997年度(平成9年4月1日～平成10年3月31日)の1年間の記録をとってみた。表3はその集計である。なお、3名の学芸員は、各自それぞれレファレンスに対処している。担当分野の学芸員が在館していれば内容にあった担当者が対応するし、もちろんその方が望ましいことは言うまでもないが、専門外の職員でもさしつかえないような内容ならば、臨機応変に対応しているのが現状である。したがって、ここでは民俗を担当している筆者が受けたレファレンスのみを集計したもので、当館で受けたものすべてを集計しているわけではない。

これらは、直接来館された方はもちろん、手紙や電話での対応を含んでいるが、口頭でのみ対応できてしまうような軽易なものではない。一応、資料の閲覧や提供などの作業を伴ったものを対象とした。表からも分かるように、レファレンス内容は実にさまざまである。その場だけでは対処ができず、調査を継続して後日回答することも多い。博物館や担当分野の知識だけでは対応しきれないような壮大な、あるいは微細な内容まで含まれることも少なくない。また、資料の特別利用(撮影など)や貸し出しが伴うこともあるため、当然ながら手続き事務が付随することになる。した

表3 大磯町郷土資料館民俗部門レファレンス集計(1997年度)

月	件数	主な依頼者	主な内容	処 理
4	4	個人、役所	史蹟、文化財、館業務	資料提供、展示解説、調査継続
5	3	個人、高校、TV局	別荘、祭礼、地名	資料提供、調査継続
6	5	個人、新聞社、企業	史蹟、文化財、施設管理	資料閲覧、資料提供
7	6	個人、大学、新聞社	建築物、祭礼、書籍	資料提供、現地案内
8	5	個人、役所	展示物、祭礼、人物	資料閲覧、資料提供、展示解説
9	3	個人、博物館、役所	所蔵資料、施設管理、別荘	資料提供、施設案内、展示解説
10	11	個人、新聞社、企業	祭礼、人物、遺跡、地名	資料閲覧、資料提供
11	3	個人、役所	文化財、人物	資料閲覧、調査継続
12	10	個人、大学、TV局	人物、祭礼、海水浴、施設	資料提供、原稿作成
1	15	個人、新聞社、TV局	人物、祭礼、海水浴、著作権	資料提供、調査継続
2	7	企業、博物館、役所	施設管理、所蔵資料、展示物	資料提供、展示解説
3	13	個人、小学校、TV局	史蹟、所蔵資料、石造物	資料提供、講義、展示解説

がって、筆者の個人的な感覚では、集計以上にほとんど毎日レファレンスの対応に追われているような印象である。専門分野以外の内容も多く、自ずと学芸員1人の受け持つ分野は広範囲に及ぶこととなり、ひいてはレファレンスが他の業務を圧迫することも決してないとは言えない。しかし、ここでは「負担の度合い」を問題にするのではなく、レファレンスの多さは資料館に対する利用頻度の多さであり、多様な内容は利用者の知的好奇心の多様な表れでもあることと解釈すべきだろう。かつて、平塚市博物館に在職していた小川直之氏は、「地域博物館というのは、地域資料についての統合的な情報メディアとしての役割を期待されている」(小川直之, 1986)として、更に学芸員に対しては「町医者的な役割を要求されている」(同)と言及したが、まさにそのことを実感する状況にある。また、同じ平塚市博物館の浜口哲一氏は、日常生活の中での博物館の役割を強調した「放課後博物館」という表現を提唱している(浜口哲一, 1992)。このように、住民が主役となってさまざまな活動を行ない、その蓄積によって博物館そのものを育てていこうという試みは少なくない。それは単に施設づくりのみにとどまらず、人づくりや町づくりにまで活動の広がりが期待できることになる。

当館でも1999(平成11)年度より、いくつかの試みを実施している。そのひとつに「民俗に親しむ会」がある。これは、民俗資料の整理を通して地域を体感していただくというものである。資料を整理するなかで、地域の方々がお持ちの情報や知識を提供していただくことによって資料そのものを活き返らせ、そして、さまざまな活用の可能性を一緒に模索していこうとするものである。決して単なるボランティアではない。人と資料と地域の真摯なかかわりを探り、あるいは新しい発見を期待する。しかし、その前提として作業そのもの楽しさを見つけることを第一義とするものである。考え方としては決して新しいものではないが、現場としてその必要性を実感しての企画といえる。

これらを試みようと考えた契機には、ひとつの

事業があった。それは、1996(平成8)年度に開催した、「衝突する伊豆半島と地震」というテーマの郷土史講座である。内容は「伊豆半島」や「小田原地震」などの地域色は出してはいたが、実際には地球的規模での地学現象をとらえたものであった。今思えば、地域だけにしがみついていた(あるいは行政的に縛り付けられていた)内容に終始していたそれまでの当館の事業から一歩踏み出したものであったといえる。同講座では町内外から大きな関心が寄せられた。当館始まって以来の聴講希望者が殺到し、人数を制限せざるを得ない状況であった。もちろん、阪神淡路大震災を契機とする危機管理意識が関心を相乗していたことには違いないのだが、見方を変えれば、受講者は<自分たちの生活の場としての地域>と<地球という大きなステージ>との相関関係に大きな興味を示したといえる。いわば、自分の住む地域にこだわりを持ちながらも広い視野を持つことの必要性を欲しているといえよう。その意味で、「まず考古学があり、民俗学があり、歴史学がありということではなく、まず地域があるところから生の資料を材料に新しい学問領域のあり方を探っていける可能性を地域博物館は持っている」(小川直之, 1997)という提言<sup>4)</sup>は、地域博物館の今後の在り方に勇気を与えてくれるし、更に地域から地球環境を考えようとした滋賀県立琵琶湖博物館の環境展示の概念<sup>5)</sup>はひとつの指針であるかも知れない。

今、筆者は、このような観念の組替えの必要性を肌で感じて企画しているものがある。「海の教室」(仮称)と銘打った事業である。文字どおり「海」をテーマとしたものであるが、比較的長いスパンで経年的に行なおうとするものである。すなわち、景観、地形、海流、気候、生態系などから海を見つめる。生業としての漁撈や海運、あるいは観光としての遊漁や海水浴など、人とのかかわりから海を見つめる。場合によってはゴミ問題や環境問題からも海が見えてくるし、やがて河川や山の問題も視界に入ってくるだろう。さらに顕在化した多くの事象に対して、当事者、利用者、行政などさまざまな立場から考えてみる寛容さも必

要だろう。つまり、海を知るためには海ばかりを見ていたのでは十分ではないことを認識し、海という素材に対して可能な限りさまざまな視点からアプローチをしてみようというものである。

## V まとめにかえて

本来、地理学は実践的である。しかし、資料館活動の中で、あるいは行政との関わりの中でどのように実践していくのかは、文字どおり学芸員の双肩にかかっている。その意味では学芸員としての資質が常に問われて続けているといえよう。そして、実践的な活動を踏まえたいうで、実生活の中で具体的にどのように役立つのかということが問われ始めている。その手がかりとして、地域博物館における活動の姿勢の中には、分野にとらわれることなく地域をトータルにとらえていく視点が求められているのである。つまり、そのようなとらえ方そのものが地理学的な視座と言えるのかも知れない。

当館では、資料の寄贈に対して送付される礼状に「郷土の環境文化を明らかにするために（以下略）」とうたっている。実は、この一文には当館の方針が集約されていると言って良い。今、あらためてこの「環境文化」ということばの意味をもう一度考えて見る必要があると思っている。当館の抱えている多くの課題や今後の活動方針はもちろん、地域博物館の学芸員としての役割と責務を考えたとき、この「環境文化」というテーマとは無関係ではありえないと考えるからである。

### 注記

- 1) 本稿では地方公共団体などの行政単位や区画にこだわらず、各館がそれぞれにテーマを設けて地域住民とともに地域研究を目指す博物館を意味して使用している。なお、本稿で例示する大磯町郷土資料館の郷土の意味も地域と概ね同義である。
- 2) 本稿は、大磯町郷土資料館の開館11年目を迎えて

資料館の抱えている課題と今後の展望をまとめた小報（佐川和裕，1999）を、本誌特集テーマに沿って大幅に加筆改題してまとめたものである。

- 3) 企画展担当者である浜田弘明氏のご教示による。例えば、ある一定の形態をもった「パン焼き器」の普及が、畑作（麦作）地帯との重なりの可能性を示唆していることなどがあげられる。しかし、このような資料を体系的に調査収集している博物館は必ずしも多いとは言えず、比較するだけの土壌が整っていないのが現状である。
- 4) 平塚市博物館の開館20周年シンポジウムにパネラーとして参加された小川直之氏は、平塚市博物館の行なってきた活動を地域研究の方法論の実践と位置付けて、地域博物館における今後の可能性についてさまざまな提言を行なっている。
- 5) 個人の生活や生産活動が地球規模の問題と深くかかわっているという現代の環境問題の特徴をふまえ、個人性、日常性を取り入れながら自然と人間の葛藤ともいべき関係性の構造を表現しようとするもの。また、環境認識に関して科学者と生活者の視点の違いを明示し、博物館展示の個人化（博物館の自分化）を提唱している。

### 参考文献

- 一囊一箝道人（1889）：『相州大山記 大磯名勝誌』天籟書屋 100p  
朝倉誠軒（1922）：『大磯案内』三宅書店／菊屋書店 125p  
小川直之（1986）：情報センターとしての地域博物館，民具マンスリー，Vol. 19, No.5, pp. 7～10  
浜田弘明（1987）：近郊都市の博物館づくりにおける二、三の私見，民具マンスリー，Vol. 20, No.4, pp. 12～16  
浜口哲一（1992）：放課後博物館の考え方，季刊ミュージアム・データ，No.20, pp. 1～5  
平塚市博物館（1997）：20周年シンポジウムの記録，平塚市博物館年報，No.20, 57p  
嘉田由紀子（1998）：地域博物館から地球環境を考える拠点としての博物館—第三世代の博物館の新たな展開をめざして—，季刊ミュージアム・データ，No.41, pp. 1～10  
佐川和裕（1999）：資料館の課題と展望，大磯町郷土資料館だより，No.18/19, pp. 2～9